

145
278



不孤庵

主人著



袖珍
志良の志る

特
9

奈良のこるべ

不孤菴主人編

特 66
952

緒

言

「四禽圖に叶ひ三山鎮を作す」と勅らせ給ひて都を遷さ

せ給ひしより、奈良は七朝七十餘年の間、民の寤も日

毎に増し市街の賑ひも月毎に加はり、世に類なき大都

會となりけむを、一たび都の平安に遷されしより、金

鞍平興をうらねてし備も大方はもとの田畝とすさかへ

とせしむいかりしかり七百敷の宮居もやがて荒烟

寒雨の中に鎮され、古郷となりし」の御製には無情

の化判りておはれ誘ふを、すがに七朝の盛時にたて

地の景勝は神威佛徳と共に餘光を存して、千餘年の久

しき靈區たるを失はず。今や文學非常に開けて温古の

業日に進み、美術の論喧しくなりてその保存に發達

し

に世の眼をそそぐと甚しくなりしより、朽ち傾きたる堂宇、色ねら虫ばみたる木像にも美術の宿れるを見、經文の斷簡器具の殘片にも歴史の材料を遺したるを知り、人造の古物の世に貴み重んぜらるるまゝにこの地の價位もとみに騰りて、三笠の山春日の野邊天然の風色も更に一段の光彩を加へぬ。ましてや四方の交通も益うち開けて市街の繁華も年を逐ひてすゝめばこの地は歴史上の地區として世に重きをねかるゝのみならず、商工上の都邑としても將來益望多き境遇にあるなり。いでや市内の大社巨剎名勝古跡を尋ねて讀者と共に今をも觀昔をも忍ばむ。

春日神社

春日神社は三笠山に鎮座まします官幣大社にして、世に謂ふ三社の一に居り。境内には年老りたる杉の樹立ち茂りて日景を遮り、社殿は其間にありて尊くも又

うるはし。祭神は武甕槌命、經津主命、天兒屋根命、姫大神の四神にして、創立は奈良の朝稱徳帝の御代なりき。天兒屋根命は藤原氏の祖先あれば氏神として同家の尊崇も厚く、神の威靈は春日の嶺と共に高く社頭には紫にはふ藤波と共にいやさかぬ。當時佛法盛んにして本地垂迹などいふ説の行はれしより、當社の四神も釋藥地觀の四佛なりと稱へ社務は興福寺の支配に屬せしが、明治維新の後神佛混淆を禁せらるるに及び新に官幣大社に列せられたり。

御鎮座由來 武甕槌命は神護景雲元年六月廿一日常

陸の鹿島を御出發ありて當國に向はせ給ひぬ。御供には社司辰市家の祖なる中臣時風、社司大東家の祖なる中臣秀行、神人梅木の祖なる舍人乙野丸の三人なりき。

さて伊賀の名張郡薦生の中山に假座し給ひ、又當國式上郡安倍山に移り給ひ、同二年正月九日春日三笠山の

頂に遷御あり、同四年正月十二日始めて神殿を今の

處に造立するに至れりとぞ。經津主命は下總の香取より、天兒屋根命、姫大神は河内の枚岡より、何れも同年の十一月に遷しまつれるなり。或は云ふ天兒屋根命はこれより先孝徳天皇の四年十一月三神に先だちて三笠山に遷り給へりと。

○大鳥居 一の鳥居ともいふ。三條道を東に行きつめたる處にあり。

○若宮の御旅所 馬出橋の少し東にして道の北傍なり。春日若宮祭禮の時ここに假御殿を造る。

○飛火野 御旅所の後あたりなりしならんといふ。飛火とは所謂烽火にて事起る時火を燒きて急を報せしなり。續日本紀に和銅五年春日の烽を置きしよし見ゆ

るはこれならん。

○雪消澤 御旅所の少し東より南へ入る道の東傍に其名残あり。

○野守池 昔雄略帝此野に狩し給ひけるに、御鷹

とれて見ぬざりければ、野守をめして問ひ給ふに、御鷹の在處を明に答へぬ。其故を問はせ給ひければ、此野にある水に鷹の影うつれるをもて知りぬと答へけり。これより野守の鏡とも申傳へたりともいへど明ならず、其處につきても飛火野の中にもありとも雪消澤の東南にあたる處なりともいひて定ならず。

○二の鳥居 の手前に車舎屋あり勅使など貴き方の参拜せらるる時には此處にて下乗せられ御車をここに置かせらる。

○祓戸神社 瀬織津姫命を祭る。神前の燈籠は祓戸形と稱へて世に名高し。これより劍先石といへる煙石の方に上らば藤の鳥居に至るべし。古此鳥居の遷に藤の木ありしをもてかくいふとぞ。

○神垣森 藤の鳥居を入りて左の方に當る小高き處なりといふ。

○着到殿 路の左側にあり一條帝を始め行幸の節に

は行在所に用ひさせ給へり。官祭の時勅使以下の人々見参を記す處なり。

○燈籠 春日神社に燈籠の多きは世に名高し。

石燈籠は近頃調査する處によれば大破の者を除きて千七百八十九あり弘法大師が弘仁中に寄附したるは最古のものなりと言ひ傳ふるに今はなし

金燈籠總數九百八十八個あり

木燈籠總て二十六あり

○白藤瀑布 明治八年に作りたる小瀑なれども夏の頃には遊客多し。

○手水の家 大國主命、須勢理比賣命を祭る。俗

に「はしりもと」の大黒ども夫婦大黒ともいふなり。

柚燈籠はこの近邊にあり。

○三十八所社 手水の家の南方東側にあり。天

神七代地神五代神武天皇より仲哀天皇に至る十四帝、

神功皇后及び伊勢十一別宮を祭れり。

是より南に進まば紀伊社などに至るべく更に進みて

は紅葉に名ある瀧阪に至るべし。今は立ちかへりて

若宮に詣でむ。

○春日若宮 天兒屋根命の御子天押雲根命を祭る

一條帝の御時長保五年三月三日本社二三の御殿の間に

現れ給ひしを中臣連是忠三の御殿に移し奉る。後百

三十二年を経て崇徳帝の御時長承四年四月廿七日中

臣祐房別に神殿を造りて鎮座し奉る。今の若宮是なり

其祭禮は今十二月十七日にして私祭なれどもその賑は

しきこと類なし。

○神樂所 若宮の前にあり。細殿御廊と棟を同じう

す。巫子の常に祗候して神樂を奏する所なり。春日の

社には昔よりこの神樂ありしが若宮の建てられたるよ

りこの處にて奏することとなれり。

若宮より本社南門に至る間に多く立ちならべるは

御間形の燈籠あり。この間に東に上るべき道あり。

之をたゞらば三笠山頂の本宮社に至るべし。

○春日神社本殿

に参拜せんには先南門より入る。

南門は承平二年の創立なり。その以前は鳥居なりしといふ。門の左右より本殿の後方にめくれる廻廊は總長さ百五間二尺七寸あり。

門を入りて正面に建てるを幣殿とす。官幣を置く處なり。又第二の間は御神樂舞樂等を奏する處なれば舞殿とも稱するなり。この前庭を林檎の庭といふ。祭儀を行ふ處なり。○直會殿はその西にあり勅使以下直會の

勸盃を行ふ處なり。古は此屋にて法華八講を修せられしより八講屋とも名づけしなり。東南隅に鳴蟬燈籠をつれり

本殿は中門の内にありて四座同しき造りにて並び建てり。東方第一殿には武甕槌命、第二殿には經律主命、第三殿には天兒屋根命、第四殿には姫大神を祭る中門の前にたてる垣を稻垣といふ田植の神事の時これ

に稻をかくるなり○中門には神前形燈籠鬼形燈籠をつれり

遷殿は本殿の西方にあり。本社御造營の節假殿にあつ本殿とこの殿との間にかゝれるを「ねぢり」廊といふ。すべて斜に造れり左甚五郎の作といひ傳ふ。

七色木

臺木は柞(いす)にして藤、椿、南天、櫻、陸英黃葉の六種其上に生せしが今は陸英黃葉の二種枯

れたり

造營の事

本社は神護景雲四年創立以來既に五十三

度の造營あり。慶長十一年後は徳川氏伊勢造宮の例にならひ二十年毎に造營することに定められ幕府より米二万石を寄附せられしが今はその事やみぬ。

○祭禮

本社の祭禮は嘉祥三年中臣秀基奏聞を経て

貞觀十一年十一月九日庚申の夜に行ひしが始めにて其後一年に兩度二月及十一月の申の日に行ひ來れり。故に申祭ともいふ。明治十九年以後祭日は三月十三日

と定り古の祭式によることとなれり。當日は勅使の参向もありて其式最尊嚴なり。

○寶物 鼈太鼓を始め樂器、裝束、面などには優れるもの頗多し武具類も少からず楠正成所用の兜、源義經所用の小手などあり。

○水谷社 素盞鳴命、大己貴命、奇稻田姬命を祭る正應年中諸國疫病流行せしかば鎮疫の爲四月二日より五日迄祭禮を行はる。これを花鎮祭とも稱へ参拜者へは神酒と青豆の搗煮とを施與したり。人々この神酒を受くれば除疫の靈驗ありとて拜戴するもの數を知らず。此日水谷能とて能樂ありしが今は絶えたり。

○水谷川 源を春日山上水谷に發し三笠山、若草山の支流を合せて吉機川となり大佛の門前を過ぎ法蓮村に至りて佐保川にあふ。左に記する名所は皆この川上にあり。

洞の紅葉 水谷社よりすこしばかり上に行きたる處にあり。

月日の窟 岩に日月の形あり氷室の舊跡なりといふ鶯の瀑布 春日山の東北芳山花山の間にあり。水谷社より半里許行きたる處にあり。

蝙蝠の窟 三笠山の後にあり。昔春日砥を採掘せし跡ならん。

○三笠山 春日山の前にありて同圍一里半其狀蓋の如し。春日神社は即ちその麓に鎮座ましますなり。

○春日山 高凡三千尺周圍二里二十町あり。其前に立てる三笠山其東北に並び聳ゆる花山芳山と共に緑樹うち茂りて聳くもうるはしき粧ひあり。前には四山とも春日社の境内なりしが今は三笠山のみ社地にて他は公園地となれり。

○若草山 三笠山の北にあり。俗に誤りて三笠山と

入り。この山芝山なれば春季には其薄緑の色春日山等の濃き緑とてりはねて景色いふばかりなし。山には

蔵も生ひ出で遠近の眺めも殊によければ遊客の上るもの數を知らず。山上には鶯塚といふあり。

○武藏野 若草山の麓あたりをいふ。

○春日野 興福寺より東三笠山若草山あたり迄を廣く稱したり。されば飛火野武藏野などは皆その中にあり。

手向山神社

手向山神社はもと八幡宮とよべり。天平勝寶元年十二月東大寺の鎮守として宇佐より平城の宮の南なる梨原宮に勸請したりしを其後大佛殿のはどりに遷し建長二年に至りて北條時頼の命により更に今の地に遷し奉りぬ。今の社殿は寛永十九年炎上の後元祿年間に造營したるものなり。今は縣社に列せらる。

祭神 本社には應神天皇、比賣太神、仲哀天皇、神功皇后の四神を祭り其南方にある若宮には仁徳天皇を祭れり。

祭禮 當社のは轉害會と稱へ天文八年迄は勅使の参向もありて嚴重なる儀式ありき。神輿は勅定の者なりといふ。

寶物 木造の瓶子、陳和卿の寄附したりといふ唐鞍康平年間に作れる鼓胴、胡樂面、勸杯面を始め優れたる寶物少からず。本社の前にある狗犬は有名なる作にて其一に雲慶と銘あり。

燈籠 石壇の側にある石燈籠は八幡形といふ春日抵にて作りたり。

○手向山 社の後方の山をいふ。その近邊紅葉多し菅家の「このたびはぬさも取りあへず」の詠ありしもまた此處なり。

東大寺

東大寺は聖武天皇の御建立にして本邦の總國分寺たり宗旨は八宗兼學なれども殊に三論華嚴を旨とす。維新の後一たび京都智恩院の支配に屬せしも今亦獨立して

華嚴宗の本山たり。其創立の由來をたづぬるに、聖武天皇曾て河内の智識寺（大縣郡にありし伽藍なり今は廢せり）の大佛を拜し給ひしより、大佛御建立の御志ははしむに、良辨僧正の御勸めもありしかば、行基菩薩を伊勢神宮に遣し給ひ又右大臣橘諸兄をも遣して神慮をうかゞひ奉りしに、天照大神は盧舍那佛の權化なりとの御託宣を得たり。やがて近江國紫香樂宮に大佛御造營のこととなり工事に取り掛り給ひしものと事成就せずして奈良に還幸あらせ給ひぬ。かくて更に今の地に造らせ給ふこととなり八度の改鑄を経て天平勝寶元年に其功成就しき。間もなく佛殿を始め諸堂も追々に造立せられて大伽藍となりけるなり。その後治承四年に至りて平重衡の燒き討ちに遇ひ伽藍は一朝にして灰燼となりぬ。後白河法皇御再興の御慮あり源賴朝を大檀那とし俊乘上人をして勸進せしめ再建成就しき。永祿十年三好康長松永久秀合戦の御當

寺は三好家の陣處となりしに誤て火を失し諸堂再燒け失せしを山田道安御首を修治し後百三十餘年を経て公慶上人勸進となりて更に佛像を修し今の佛殿を作るに至れり。創立の當時より今に至りて凡千百餘年時に寺門の盛衰なきにあらねど天下無比の銅像は長く佛威の高きを現すと共に工藝の著しく發達せるをしめし世人仰慕の深きは古今のかはりなきなり。

○三月堂 法華堂とも續索院とも又金鐘寺ともいふ天平五年聖武天皇の勅命により良辨僧正の創立したるものにして大佛の建立に先だつこと實に十四年。堂宇は當時建立の儘に残りて東大寺中最古の建築物たり。北面の執金剛神は良辨の守護神にして蜂の宮ともいふ承平年間將門退治に與りて功ありしよりいひ傳ふ、堂内に有名なる佛像多し。

○二月堂 創立は天平勝寶四年、開基は實忠和尚なり。本尊は十一面觀音の銅像にして之を大觀音とい

ふ。厨子に安置せる小観音は實忠和尚が難波の浦より得たりといふ尊像にて長七寸あり。其膚温暖なれば肉身の像といふ。世人の信仰頗深し。今の堂は寛文七年炎上の後二年を経て徳川家綱の再建したるものなり。良辨杉は堂の前にあり。古金色の鷲一の嬰兒を取り來りて大なる杉の樹のうづばの中にねきたりしを、義淵僧正之をつれ歸りて養育したるが此兒成長の後良辨僧正となりたるなりともいひ、又良辨僧正童子の時に居給へる跡に櫟の木生ひしが櫟倒れて後杉の木生ひたるをいふと。

二月堂には三月十日より十四日に至る間法會あり。修二會といふ。俗に「れたいまつ」といふこれなり。天平勝寶四年實忠和尚のひらきしより今にたぬす。行法する僧侶の籠り所より本堂に參詣する道を照さんため松明をさしげゆくなり。十二日目は大松明ととなへて尤見事なり。

若狭井 實忠和尚二月堂行法の初夜に神名帳を讀み上げて供養したるに其時若狭遠敷明神願くは我悶伽を奉らんと御つげあり、黑白二つの鵜若中より飛びいでしがそより水湧き出でしを井戸とはしたるなり。今は三月十二日の夜半に七荷半を汲み取り二月堂に納めて香水とす。此の事古來絶ゆることなし。

若狭井より下らば浴室に至るべし。むし風呂なり此内に天平時代に鑄たる二十八石入りの大釜あり。

○開山堂 若狭井の西南邊にあり。本尊は良辨僧正の座像なり。自作なりといひ傳ふ。又實忠和尚の座像良辨襟掛觀音あり。

○三昧堂 俗に四月堂といふ。本尊は三尊阿彌陀如来なり。治安元年の創立にして天和二年に修理を加へたり。堂内に慈覺大師の作と傳ふる普賢菩薩の座像あり。故に此堂を普賢堂ともいへることあり。

○念佛堂 本尊は地藏菩薩の座像にして長七尺四寸

あり。木製にして俊乘上人の作と言ひ傳ふ。

○行基堂 念佛堂の北にある小堂にして行基菩薩の座像を安置す。

○俊乘堂 行基堂の西にあり。又淨土堂ともいふ本尊は俊乘上人の座像なり。今の堂は公慶上人、大佛再建の節餘材をもて作りしなりとぞ。

○鐘樓 天平年間の構造に係るといふ。鐘の高一丈三尺六寸、口徑九尺一寸二分、厚八寸、銅廻り二丈七尺あり。熟銅五万二千六百八十斤、白鐵二千三百斤を要したりといふ。

○大佛殿間數
東西 三十三間 南北 三十間
棟高 二十四間 柱數 六十本
廻廊南表 百四十四間餘 東表西表各六十七間餘

本尊金銅盧舍那佛座像
總長 五丈三尺五寸 面長 一丈六尺
面廣 九尺五寸 眉長 五尺四寸五分

目長 三尺九寸 鼻前徑 二尺九寸四分
鼻高 一尺六寸 口長 三尺七寸
耳長 八尺五寸 肩長 二丈八尺七寸
胸長 一丈八尺 腹長 一丈八尺
臂長 一丈九尺 肘より腕に至る長 一丈五尺
掌長 五尺六寸 中指長 五尺八寸
脛長 二丈三尺八寸五分 膝前徑 三丈九尺
膝厚 七尺

螺髮 九百六十六 各高一尺 徑六寸
後光一基 高八丈三尺 横二丈五尺 厚五尺
佛像鑄料 熟銅七十三万九千五百六十一斤、練金一万四千四百六十六兩、白鐵一万六千八百八十八斤、水銀五万八千六百二十兩、炭二万六千五百五十六斛

脇士 左方 如意輪觀音 右方 虚空藏菩薩
○金燈籠 大佛殿の正面にあり。八角形にして高さ一丈三尺。扉には伎樂天女と走獸の圖。柱には施燈功德經を刻めり。文治年間陳和卿の作なりと言ひ傳ふれ

とも其二百年以前既に此燈籠ありしよしの記録あり。且康和年間（文治より百年許前）に修治したる由は寶

珠の銘文もあれば古き代の者たるは明なり。文治年間には扉二枚を修治せるならんといふ。

○南大門 天平勝寶四年の建立なり。應和二年八月(村上天皇の朝)大風の爲に顛倒したるを其後二百三十八年を経て正治元年六月(土法門帝の朝)古木を以て再造したりといふ。桁行十六間半餘、梁行七間、高さ十三間半なり。二王東方密迹力士は湛慶の作、西方金剛力士は運慶の作なり。各長二丈六尺五寸あり。門の北方にある石の狗犬は名作なりといふ。

○戒壇院 日本最初の戒壇にして三戒壇の第一に居り。天平勝寶六年唐僧鑑真來朝するや大佛殿の前に戒壇を築きて聖武天皇帝光明皇后を始め奉り僧侶四百四十餘人戒を受けき。其後これを今の處には引き移されしなり。堂内には有名なる四天王の塑像あり。傳に鳥佛師の作といふ。

○正倉院 勅封の寶庫にして今は宮内省の管理に屬せり。その寶物は孝謙天皇が御父聖武天皇の御物を冥福を祈らせ給はん爲東大寺へ獻納し給ひたるものにして、當時の服飾器具等美術の模範とし歴史の參考とすべき希代の品頗多し。有名なる鴨毛屏風、蘭奢待などをも納めたり。庫は校倉にして三區に分れたれば三庫ともいへり。創立以來千百餘年よく天災兵火をのがれたるは實に天幸といふべし。

知足院 正倉院の東なる丘の上にあり。本尊地藏菩薩なり。碾磑門天平年間南大門建立の殘木をもて造立したるなりといふ。大佛供養の日景清ここに潜みて頼朝をうかひしを畠山重忠に見あらはされたりとて俗に景清門とよぶは妄説なり。

景清門より西に入る街道は舊都の一條通なり。行くこと數町にして法蓮村にいつべし。北に向へば佐保川を経て般若寺に至るべし。

○聖武天皇佐保山南陵 法蓮村にあり周回三百

三十三間五分。其東に並びて仁正皇后佐保山東陵あり。周回二百二間七分。仁正皇后は聖武天皇の皇后にましく世に光明皇后と申し奉る。

佐保川 春日山より發して未は大和川に入る。蝻をもて奈良八景の一に居れり。

○多門山城址 聖武帝陵の東方にあり。松永久秀の城を築きて居たりし所なり。其築造堅固なりければ多門造と稱へて當時築城の模範たりしといふ。

○北山十八間戸 此浴室は仁治元年鎌倉の極樂寺忍性菩薩慈善の爲に建てて乞食病人を浴せしめたるなり

○般若寺 高麗の僧慧灌舒明天皇の勅を受けて般若臺といふ者を建てしを其後聖武天皇の朝に伽藍に改めたり。本尊は文珠の木像なり。堂宇は治承四年平重衡の兵火に罹り建久六年勅命によりて東大寺と共に營造せられしが其後も屢火災に罹れり。されど櫻門と經藏は幸に昔のまゝに残れり。今の觀音堂は即

舊の經藏にして其本尊の觀音は岩淵寺勤操僧都の作といひ傳ふ十三重の石塔婆は高五丈餘あり。聖武天皇の御建立なり。南北朝の頃護良親王當寺に忍び給へるこ

とありき。その身を隠し給へりしといふ經櫃は今猶當寺に藏せり。又神功皇后三韓征伐の御弓矢といふはもと大安寺の所藏なりしを今は當寺の寶物となれり。

○元正天皇奈保山東陵 般若寺の西北にあたる奈良坂にあり。元明天皇奈保山西陵は其西にあり

○奈良坂 奈良町の北はづれなり。

是より北せば木津長池等を経て京都に至るべし今は此街道を立返りて興福寺の方に歸るべし

○轟橋 押上町の今威徳井橋といへるがこれなり

といふ。又雲井坂の南手にありしともいふ。轟橋の行人は奈良八景の一つにかぞへらる。

○雲井坂 押上町の南はづれの坂なり。雲井坂の南も奈良八景の一なり。

○氷室神社

祭神を仁徳天皇、額田大中彦皇子、

闘難稻置なり當社はもと水谷川上にありしを建保五年

此地に遷しまつれるなりといふ。

○帝國奈良博物館

明治廿二年をもて帝國博物館并

びに京都奈良博物館を置かるることとなり明治廿五年

六月初めて工事を着手し同廿七年十二月に竣功しき。

建築費 殆 十萬圓を費せりといふ。

○奈良俱樂部

明治廿三年に新築落成しき。同年皇

后陛下當地へ御行啓の砌御宿舎にあてられき。

興福寺

興福寺は南都七大寺の一にして法相宗の本所なり。其

創立をたづぬるに齊明天皇三年藤原鎌足、蘇我入鹿を

誅伐せん志願にて丈六の釋迦像、脇侍二菩薩、四天王

等の像を造り山城宇治郡小野郷山階村陶原の家に安置

せられしを天智天皇八年嫡室鏡女王の御願にて其地

に伽藍を建立せられ山階寺と號しき。その後天武天皇

白鳳元年に至り當國高市郡厩阪に移されて厩阪寺と改

稱せしが元明天皇和銅三年に及びて藤原淡海更に今の

地に移しかへて伽藍を造營せられ朝廷興國家福の義

に取りて名を興福寺と改めたるなりといふ。當寺は佛

法興隆藤原氏繁榮の時に際して奈良の新都に移されたる

なれば藤原氏一門の檀越として信仰深きのみならず朝

廷の御尊崇も淺からず、東大寺と共に造寺長官をさ

へ定められて大德智識常に法座を占め勢最盛に天

下亂れ初めて後は多くの僧兵を蓄へ南都北嶺と並び稱

へられて世の恐るる所となりき。伽藍は元慶以後數回

の火災に罹りしも常に再建ありて寺門の榮々昔にかは

ることなかりしが享保二年重ねて大火に遇ひ僅に三四

の諸堂を餘して他は悉く烏有に歸したるを維新後更

に諸堂の取り拂はれたるもありて今は昔の面影をもと

いめねども此を思ひ彼を見んには猶舊時の摸様の如何

なりしやをうかゞふべきものなしとせず。

○東金堂 聖武天皇の御願により神龜二年七月に御建立ありしものなり。本尊は金銅の藥師如來脇士金銅日光月光大士(長各八尺五寸)なり。回祿數度に及び今は應永廿二年に建立したるなり此堂にある佛像には有名なるもの多し。

大湯屋 東金堂の東方にありて大釜あり(口徑四尺五寸胴廻り六尺一寸高四尺一寸厚二寸五分)古浴室なりしといふ大衆蜂起の集會所なり

花の松 元祿年間廣瀬佐次右衛門といふもの先祖菩提の爲に植ゑたりといふ高十四間枝の廣がること東西十八間南北二十二間餘

○五重塔 天平二年光明皇后の御創立にして寛仁元年雷火の爲に焼失し其後長元四年に再建したりしを回祿數度の後康永二十八年に建立したるは即今の塔なり東方にして藥師南方には釋迦西方には彌陀北方には寶生如來を安置す高さ十五丈一尺あり。

○金堂 和銅三年三月藤原淡海の建立にして彼の鎌足が作れる釋迦三尊等の像を安置せり。回祿數度に及び享保以後未再建するを得ず。今の堂は文政年間に建てたる假堂なり。

○北圓堂 養老五年に元明元正の兩帝藤原淡海の周忌に當りて御建立ありたるものなり。炎上數度の後應永六年五月に建立したるは今の堂にして八角寶形造なり。

○南圓堂 藤原淡海の孫内麻呂に至りて北家の勢やう衰へぬれば内麻呂の子冬嗣これを歎きて弘法大師に謀り給ひ弘仁四年此堂を建築することとなりぬ。この時春日明神「補陀落の南の岸に堂たてよ今ぞさかむ北の藤波」とよみ給へりといひ傳ふ。本尊は不空絹索三目八臂丈六の本像にして左肩に鹿の皮をかけたり。今の堂は寛政元年の造立にして八角寶形造なり。西國三十三番札所の第九に居り。藤花は奈良八景の一

なり。

鐘樓 鐘は十三鐘といへるをうつしたるなり。

○三重塔 康治二年八月待賢門院の創立に係る。

○寶物 泗濱淨磬石（竪一尺一寸八分横一尺五分厚五分）華嚴磬天燈鬼龍燈鬼並びに南圓堂燈籠火舎の扉等は有名なるものなり。

○菩提院 一に大御堂といふ又俗に十三鐘ともいふ十三鐘とは興福寺の僧侶の春日神社へ修行に行く合圖にせんため七ツ時と六ツ時との間に此寺にて鐘を撞きけるより其數をあはせてかくいへるなり。其鐘今は南圓堂のかたはらにうつして時をしらせり。

○猿澤池 天竺の獼猴池をうつして造りたりといふ周圍百八十六間餘池中に鯉多し。月をもて奈良八景の一に居れり。昔奈良の朝に仕へたる采女寵の衰へたるを歎きて此池に溺れ死したるを帝あはれにればし給ひ池のほとけに御幸ありて歌よませ給ひぬ。

采女社 池の西邊にあり。

衣掛柳 采女の身をさぐる時衣をこゝにかけたりといふ。

○元興寺 芝新屋にあり。元正天皇養老二年高市那飛鳥にありし法興寺を新京に移されて元興寺といへり

南都七大寺の一にして其境内も廣く小塔院極樂院金佛寺十輪院など皆其子院なりしを年を経るまゝに衰へて本堂五重塔も安政六年に焼け失せて今は一小堂を殘せるのみ。

○極樂院 中院にあり。もと元興寺の中院なりしが今は西大寺の末寺となれり。本堂は養老年間建築のまゝに存す。本尊は阿彌陀如来の座像にして稽文會稽首勳の作と傳ふ。本坊には智光法師の住めことありて智光の書したる板曼陀羅あり。（廣長共に二尺許）又堂内に高一丈五尺許の塔あり。元興寺の塔建立の時百濟國の職工が試に作りしものといふ。佛像の有名なる

二十九

ものまた多し。

○十輪院 極樂院の東南十輪院にあり。眞言宗にて聖寶の創始なり。或は弘法大師の開基ともいふ。其禮堂は元明天皇の宮殿の一部を賜はりしものなりと。本尊は石窟中に刻める地藏菩薩にて脇士は釋迦彌勒なり其外面左右には十王八大王四天王等を彫れり。弘法大師の作と傳ふ。又こゝに朝野魚養の墳あり。

○金体寺 十輪院の南にあり。或はいふ元興寺の一院なる南光院の舊跡ならんと。南光院は道照の住坊なりと。

○福智院 一名清水寺といふ昔狭川の福地庄にありしをこゝに移したるにて其後西大寺の興正これを再興したりといふ。本尊地藏菩薩あり坊目拙解すれば天平八年玄昉の創始したる清水寺の古跡にして京都の清水寺は延鎮がこれになりひて建立したるもの如し。

○頭塔塚 福智院の東方にある岡なり。玄昉の首を

埋めたりといふ。又良岑安世の墓なりとの説あり。

○新薬師寺 高畠にあり。一名香薬寺といふ。創立

は聖武天皇なりとも光明皇后なりともいふ。天平勝寶二年には寺領五百町を寄せられしが其後徳川氏の時八百石を寄せられたり。本尊は薬師如来にして脇士日光月光なり。又十二神將は有名なる塑像にして元岩洞寺のものなりしといふ。聖武帝の御祈念佛なりしといふ薬師の銅像ならびに涅槃の圖も逸品なり。

○鐘神社 新薬師の門前にあり。藤原廣嗣の靈をまつるといふ。

○白毫寺 新薬師寺の東南にあり。天智天皇の本願にて勅撰の開基せるものなり。地藏堂の地藏は小野篁の作、閻摩堂の閻摩は菅原道眞の作といふ。中世伽藍雷火にかくりしを建長中西大寺の興正再興せり。

○高圓山 白毫寺の上方にあり故に白毫寺山ともいふ。

○紀寺 璉城寺ともいふ。本尊今は阿彌陀如來なり
○誕生寺 木辻の三棟にあり。中將姫誕生の地なりといへども元興寺の一院にして灌佛具を納めたる堂なりと。

○率川坐大神御子神社 子守にあり。媛踏躰五十鈴姫命玉櫛姫命狹井神を祭る。官幣大社大神神社の攝社なり。當社の三枝祭は有名なる祭禮なりと。

○率川坂上陵 油阪にあり開化天皇の御陵なり

○漢國神社 園神韓神を祭る

○安養寺 北袋にあり阿彌陀佛を本尊とす。平城帝の創立にしても東城戸にありしを慶安二年ここに引移したりといふ。

○平城都趾 元明天皇和銅三年都を平城に遷し給ふに當りては市街添上添下の兩郡に跨り皇居は佐紀近邊にありき。其中央南北に貫けるを朱雀大路といひ其左

右に各四條の大路あり東方を左京といひ西方を右京といへり又東西に貫ける大路ありて一條より九條に至れり。今其名の町村名に残れるもの多し。今の奈良町は應仁の亂後寺社の所領なと沒收せられ工商なと多く來り住みしより市街の形をなすに至れるにて昔の平城の都の趾にはあらず。

○西山めぐり

奈良の西北なる法蓮を出で、法華寺秋篠寺西大寺招提寺藥師寺等奈良の西方にある古寺をめぐるべし。

○興福院 法蓮にあり。もと興福尼院と稱し添下郡菅原伏見の里にありしを寛文五年ここに移し達てたり今も尼院にして本尊は阿彌陀如來なり。

○不退寺 興福院の西方にあり。本尊觀音菩薩寺傳に平城帝大同四年御讓位の後ここに茅葺の殿を築きて移りましくしが皇子阿保親王其御子在原業平相つぎてここに居給へり。承和十四年に至りて業平詔をう

けて宮殿を寺院に改め自作の観音を安置せりと。

○海龍王寺 不退寺の西方にあり天平三年光明皇后の本願にて創立せられたるものにて僧立防唐より歸朝の後暫くここに住せり。本堂講堂西金堂等皆天平年間の建築なり。

○法華寺 此地もと藤原不比等の邸宅なりしが光明皇后先帝及老妣の爲に伽藍を創立し給へり。聖武帝諸國に國分寺を建て給ふに當り僧寺は東大寺、尼寺は當寺をこれに充てられたり。故に當寺を國分尼寺とも法華滅罪之寺ともいへり。天平勝寶元年には墾田一千町をも施入せられ堂塔も多かりしが後衰頽して西大寺興正の再興せしことあり其後また漸く破壊したるを慶長六年豊臣氏片桐且元をして興復せしめたり。即今の本堂にして舊金堂の殘木もて建てたりといふ。本尊は十一面觀音にして秘佛なりき。横笛堂は當寺の東の門の内に入り横笛は建禮門院の雜司にて小松殿の侍に

あひなれしが侍は後僧となりて隠れしかば終に尼となりて此寺にゐたることありとなり

○御陵 法華寺より秋篠に至る間には御陵多し。御跡村の佐紀に楊梅陵(平城帝)奈良坂上陵(仁德帝)皇后磐之姬命)同村の山陵に狹木寺間陵(垂仁帝)皇后日葉酢姬命)狹城盾列池後陵(成務帝)高野陵(稱徳帝)狹城盾列の池上陵(神功皇后)あり

○秋篠寺 光仁桓武兩帝の本願にして寶龜十一年善珠僧正の開基したるものなり。本尊の薬師は行基の作なりといふ。當寺初めは七堂ならびたちて僧舎も一千餘區ありしといへど保延元年兵火にかゝりてより舊態に復する能はず。たゞし今の本堂はもとの講堂にて幸に災厄をのがれて今に存するなり。

○西大寺 南都七大寺の一にして天平神護元年孝謙帝の勅願により建立せらる。開基は常騰なり。當時寺域三十一町寺領凡二十万石ありて頗宏大なるもの

なりしが承和十三年備前炎上せり。其後再建したりし
も貞観二年又焼失し是より大に衰微したりしが嘉禎
二年に至り興正菩薩之を再興せり。後文龜中に至りて
堂塔又焼失し再興の時を詳にせず。但観音堂は延寶
二年の造營なりといふ。徳川時代には寺領僅に三百石
にて一たび興福寺末となりしが今は真言宗の一本寺と
なれり。

本堂の本尊は釋迦如來の立像なり。前には孝謙帝の鑄
造せさせ給ひし金銅四天王像を本尊としたりき。今は
此像観音堂にあり。観音堂の本尊は十一面觀音にして
鳥羽帝の勅願にて竣工の後京都よりここに移したるも
のといふ。

愛染堂の本尊は愛染明王也。弘安の昔元寇九州の海岸
に推し寄せし時異賊退治の祈願をあしくに明王の持て
る鎧矢西にとびゆき敵をうちたりといひつたふ。

○菅原神社 西大寺の南方にあり天穗日命野見宿禰

を祭る。野見宿禰は垂仁帝につかへ奉りて菅原伏見の
陵の喪葬を掌りしより景行帝詔して其部屬土師を
陵戸とし兼て山守たらしめ給へり。これより菅原氏は
永く菅原伏見里に住めり。古人に至りて菅原氏とよべ
り。

○菅原寺 喜光寺ともいふ。菅原神社の南方にあり
本尊は阿彌陀佛也。靈龜元年行基の創建にかゝる。行
基は天平二十一年當寺の東西院にて寂せり。

○菅原伏見東陵 垂仁帝の陵なり。寶來山と字せ
り。

○菅原伏見西陵 安康帝の陵なり。

○唐招提寺 天平寶字三年唐僧鑑真聖武帝の御爲に
新田部親王の舊宅につきて創建したるものにて律宗最
初の伽藍なり西大寺衰微したりし後當寺を南都七大寺
の一に數へたり。

金堂は唐僧如寶の建てたるもの也本尊盧舍那佛(丈八

尺) 黏漆造にて唐僧思託の作といふ。脇士千手観音立像薬師立像なり。

講堂は天平寶字三年平城の朝集殿を移したるなり勅命により鑑真この殿にて戒律を講せしより講堂と稱したり本尊は彌勒座像なり。

禮堂は天平寶字三年の創立にして建仁年間解脱上人大修理を加へ天井を張れり。世に解脱張といふ。本尊は釋迦如來赤梅檀像にして厨子の兩扉に八相成道の圖あり金剛の筆なりといふ。

舍利殿も天平寶字三年の創立にして解脱修理を加へたり。佛舍利三千粒を本尊とす。

右にあげたる諸堂の外鼓樓寶藏等も當時建築のまゝに残りて今猶有數の大伽藍なり。

境内には孤山松滄海波池醍醐味泉鞍馬櫻など名所あり

○藥師寺 招提寺の南方にあり。法相宗なり。天武帝即位八年后不豫のため創立し給ひ文武帝の時始め

て成功せり。もと高市郡にありしを元明帝養老二年に

ここに移されぬ。當時は寺領も多く規模また宏大なり

しが屢火災に遇ひてやう衰へたれども猶七大寺の一

たるにはぢず。

金堂は享祿二年兵火にかゝり延寶二年に再建しき。本

尊は金銅藥師如來座像脇士日光月光共に天武天皇の勅

願により白鳳九年に鑄させ給ひしものなり。佛壇は大

理石にて長六間幅二間高一尺八寸あり。養老年間百濟

國王の貢獻したるものといふ。

講堂は屢兵火にかゝり今のは文化二年に再建したり。

本尊は金銅藥師如來座像脇士金銅日光月光なり。この

本尊は中古以來西院堂に安置せしを文化年中此堂破壊

したるより今の堂に移したりと淳和天皇天長六年より

此堂にて最勝會を修行せらる。こは本朝三大會の一に

て有名なるものなりしが享祿火災の後廢絶せり。」

東院堂は養老五年長屋王の建立せるまゝに残れり。本

尊は閻浮檀金の正觀音立像にして養老年間百濟國王の
貢獻したるものなりといふ。

東塔は聖武帝の勅願により天平二年に建立せられたる
ものにて幸に火災を免れたり。高さ十一丈五尺にして
五間四面なり。六層をなす。九輪銅柱の銘文は舍人親
王の題書なりといふ。

佛足堂には佛足跡の磐石を安置す。其上面には釋迦の
足跡を彫り正面右面等には靈驗の事實傳來の緣由等を
しるせり。其後にへたる碑は高六尺餘廣一尺五寸の
り歌十七首を刻す。平城朝美術の一端をうかがふべき
ものなり。

○大安寺址 大安寺は聖德太子が平群に熊凝精舎を
建て給ひしより屢處を移すと共に其名をも改めしが元
明天皇遷都の際更に高市郡より此地に移され規模宏大
にして七大寺の一なりしが今は廢滅して其跡を見のみ
奈良とるべ終

明治廿八年四月十九日印刷

明治廿八年四月廿五日發行

編輯人 水木要太郎

發行者 辻本朔次郎

奈良縣大和國添上郡奈良町
大字梅井六番邸

印刷者 山口恒七

大阪市西區阿波堀通
二丁目六番邸

版權所有

正價金五錢

大 賣 捌 所

奈良町大字橋本

豐住書房

奈良町大字橋本

阪田書房

大和郡帶解

木原書房

全

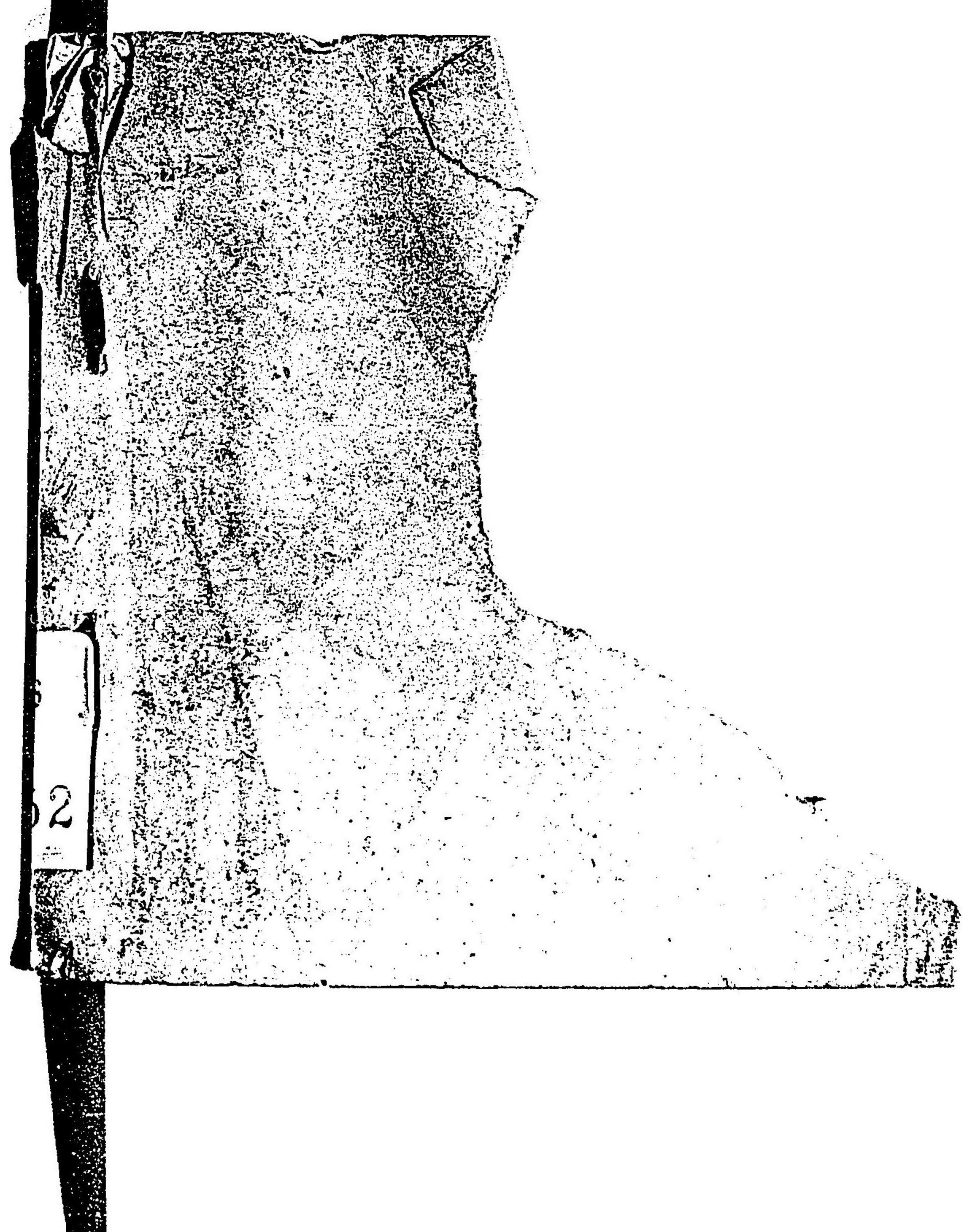
井久保書房

大和郡山町

宮澤書房

全

小島書房



025568-000-1

特66-952

奈良のしるべ(袖珍)

水木 要太郎/編

M28

ADC-3059

